

■公共図書館での実践事例

わいわい文庫「日本昔話の旅」シリーズ製作協力にチャレンジ ～特別支援学校生徒・語りの会ボランティアとの連携

新潟県燕市立図書館
石原 均

はじめに

2021年4月、燕市立図書館長就任と同時に、読書困難者向け資料の所蔵数増加を図るため、伊藤忠記念財団にマルチメディアDAISY図書「わいわい文庫」の寄贈をお願いいたしました。財団のご配慮により、寄贈図書は2011年3月に第1回配布されたものを含め、現在はすべて保有しております。しかしながら、当該資料に対する認知度がまだまだ低く、普及策を講じる必要性を感じておりました。

そんな中、新潟県立吉田特別支援学校の生徒たちが先生に引率され、別館の燕市立吉田図書館を利用され、実習中のお姿をいくどか拝見しておりました。いつしか、この生徒たちとマルチメディアDAISY図書を図書館と一緒に製作したいと思うようになりました。

今回の製作にこだわった理由は、生徒たちが連携して携わることで自信や励みを感じることができるのではないかと、連携した団体との関係をさらに深めたい、新潟県に伝承されてきた民話を全国に伝えることができる、結果、

マルチメディアDAISY図書の普及にも生かせると考えたからです。

素材製作のプロセス

わいわい文庫「日本昔話の旅」シリーズ製作のためには、地域に伝わる数多くの民話の中から一つ選ぶことから始まります。個人的には、楽しめて心温まるものが好きですが、今回はボランティアの方に選定をお任せすることにしました。つぎに昔話の内容を理解するための画像が必要となりますので、挿画を描いてくれる団体を探さなければなりません。そして、昔話を読んでいただく方、しかも、音声は標準語とお国訛りの二つが必要となります。最後に、音声に合致した文字データ作成までが素材製作の一連の流れとなります。

最後に、その素材を伊藤忠記念財団がマルチメディアDAISY化して、作品は完成します。

(1) 特別支援学校の生徒が、昔話の世界を描いてくれました

わいわい文庫「日本昔話の旅」シ

リーズを拝見すると、挿画製作は、図書館スタッフ、地元の高校美術部生徒、大学の美術サークル、紙芝居団体などが手がけているのが多いように感じています。今回は、「新潟県立吉田特別支援学校」の中学部生徒にお願いしております。



挿画製作の様子

私が支援学校に提案した際は、最初、少し驚かれていたようです。提案の趣旨説明から始めたと思います。まずは通常、読書困難者向け資料の製作は健常者が携わるのですが、特別支援学校などの生徒も同じようにできることを説明いたしました。なぜなら、過去に私自身が栃木県内の公共図書館在任中

に経験していたからです。第二に、学校生活の励みや社会に貢献をしていることを感じてもらうことで、日々の生活に自信がもてるようになるのではないかと考えたからです。第三には、学校、ボランティア団体、図書館、伊藤忠記念財団の四者が連携して一つのものを製作するという一体感を皆で感じましようとしたと説明したと記憶しております。

挿画を描いていただく昔話は、5月下旬に決定いたしました。6月22日に学校、ボランティア団体、図書館の担当者が集まり、昔話『風の神と子ども』をボランティア団体の方に標準語と新潟訛りの二つを、学校の教室で読み聞かせしていただきました。

特別支援学校中学部の神田裕子教諭が学校側の取りまとめをしてくださることになり、10月完成を目指しましたが、神田先生は大変ご苦労されたと思います。物語の表紙はどうするのか、どの部分を挿画に描写するのか、色合いはどうか、分担はどうしようかなど多くの課題を生徒と一緒に取り組まれたはずです。

9月29日、神田先生からほぼ完成に近いご連絡をいただき、学校を訪問し挿画を確認いたしました。どれも出来栄は素晴らしく、改めて提案した喜びを感じることができました。

担当された神田先生からは、つぎのようなコメントをいただきました。

- ・子どもたちの好みやイメージした内容が大きく異なっていたため、一つの作品として仕上げるのに一番苦労いたしました。
- ・子ども全員の良さやオリジナリティーを取り入れられるように、役割を分担したり調整したりし製作を進めました。子どもの発想や思いを引き出すために子どもの言葉を拾い、のびのびとありのままに作品に盛り込めるように支援したと思っております。
- ・今後は、「新潟県の昔話である」といったことを、さらにピックアップしていけるとよいと感じています。

以上が神田先生からいただいた感想ですが、予想通り、昔話の内容のどの部分を抜粋するのか、そしてそれをどのように挿画として表現するかに苦労されたとあります。携わってくれた生徒たち、神田先生には感謝の言葉しかありません。

(2) ボランティア「燕語りの会」

地元で伝わる昔話に精通している団体として、「燕語りの会」というボランティアの存在を知り、ここにお願いすることになりました。5月7日、ボランティアの方と担当する図書館スタッフが集まり、協議の場を設けております。

わいわい文庫「日本昔話の旅」シ

リーズ製作の意図から始まり、団体の作業分担をその場でご説明しております。新潟県の昔話の中から今回、一つを選定していただくこと、その音訳については標準語と新潟の方言の二つをお願いいたしましたが、快くお引き受けいただきました。

ボランティア団体の方から、決定した昔話を特別支援学校の生徒たちに読み聞かせしたいとの意向を受け、6月22日、関係者全員の顔見せと、ボランティアの方々による読み聞かせを行っております。これから作品を協同で完成させるという意識を高めるうえでは、とても貴重な時間となりました。



昔話の読み聞かせ

10月中旬に標準語と新潟の方言の二つの準備が整い、図書館が担当するはずの文字化のほとんどを「燕語りの会」の方にやっていただき恐縮してしまいました。

11月9日、録音作業を行い、その際に雑音の侵入を防ぐため公民館の音楽室をお借りいたしました。標準語と新潟の方言ご担当のお二人は、事前に何度も練習されて臨んだと思われ、スムーズに録音は終了しております。

録音終了の後、ボランティアの方々全員から感謝のお言葉があり、お任せしてよかったと感じております。ボランティアの方々には、私から機会があればまたお願いしたいとお返しいたしました。

(3) 図書館

私の独断のような形で最初は始まりましたが、担当者は障害者にとっても理解のあるスタッフばかりでしたので、その後の計画はスムーズに消化できました。連携してくれた学校やボランティア団体との調整もうまく図れたと感じております。進捗管理をしっかりとすることが、図書館の一番の役割かもしれません。

成果と今後の取り組み

マルチメディアDAISY図書を公共図書館が作成する機会は少ない中で、素

材を提供することでその機会を得られたのが、わいわい文庫「日本昔話の旅」シリーズへの協力です。また、これからの図書館サービスは、地域との連携がとても重要とも言われています。



「わいわい文庫」体験会

読書が困難な方への資料を図書館が製作し提供する、しかも学校・ボランティア・図書館が連携した協同作業から生まれるという意義は大きいと感じています。今回、読書がむずかしい方への資料製作に、特別支援学校の生徒たちがチャレンジしてくれました。読書バリアフリー法の求める共存は、まだ道半ばが現実です。しかしながら、図書館の「読書がむずかしい方への資料提供サービス」への役割はとても大きいと考えており、図書館の果たす可能性を信じています。

